

## 世界同時不況と鉱工業指数～その3～

### 【回復してきた大分県の鉱工業生産指数】

大分県の鉱工業生産指数（季節調整済指数：平成17年＝100）が10月には、103.5まで回復してきた。

平成20年秋に始まった世界同時不況前の水準に、まだ完全には戻っていないものの、全国や他県に比べて平成21年2月に底をつけてからの回復ペースが著しいことは、毎回掲げている図1に現れている。

### 【全国との比較】

今回もその要因を業種別の動向から探ってみた。上昇寄与度を全国と比較したものが図2である。

大分県の場合、平成21年2月から10月までの上昇率の半分以上を電子部品・デバイス工業と鉄鋼業が支えた。

これに対して全国では輸送機械工業と電子部品・デバイス工業が上昇の主役であり、特に輸送機械工業は、上昇率の3分の1以上を占めている。輸送機械工業の生産指数は、平成20年5月（不況前の高い水準時）の120.3から、平成21年2月（不況後の底）には52.4まで落ちていたのが、平成21年10月は87.8まで回復してきた。エコカー減税や輸出の持ち直しによる自動車生産の復調が全国の鉱工業生産指数全体を押し上げたことがわかる。

より詳しく業種の内訳を見るために、図3では業種別のウエイトと平成20年9月から平成21年2月、平成21年2月から10月までの変動率の関係を比較した。

※大分県、全国それぞれに生産指数のウエイト（付加価値額ウエイト）の高い順に、業種を左から並べている。

大分県、全国ともに、平成20年9月から平成21年2月までの下落率と平成21年2月から10月までの上昇率が対照的なグラフとなって

いる。

平成21年2月から10月までの上昇率について見ると、大分県では、ウエイトの大きい電子部品・デバイス工業（上昇率：179.0%）、鉄鋼業（同：86.3%）、それに化学工業（同：51.0%）の上昇率が高く、全体の生産指数を押し上げた。しかも、この3業種は2月までの下落を上回る上昇を示した。

それに対して全国では、輸送機械工業（上昇率：67.6%）、電子部品・デバイス工業（同：67.1%）を除いてウエイトの大きい業種の上昇率が低く、この点が大分県との回復率の違いとなって現れた。

#### 【不況前の水準まで回復した業種】

本県の主要業種のうち、生産指数が不況前の水準まで回復した7業種の指数の推移を図4に示した。この中で、精密機械工業と食料品工業は不況の影響からほとんど無縁だった。

#### 【生産指数上位県の特徴】

図1で徳島県と鹿児島県の2県の10月の生産指数が本県の103.5を上回っている。

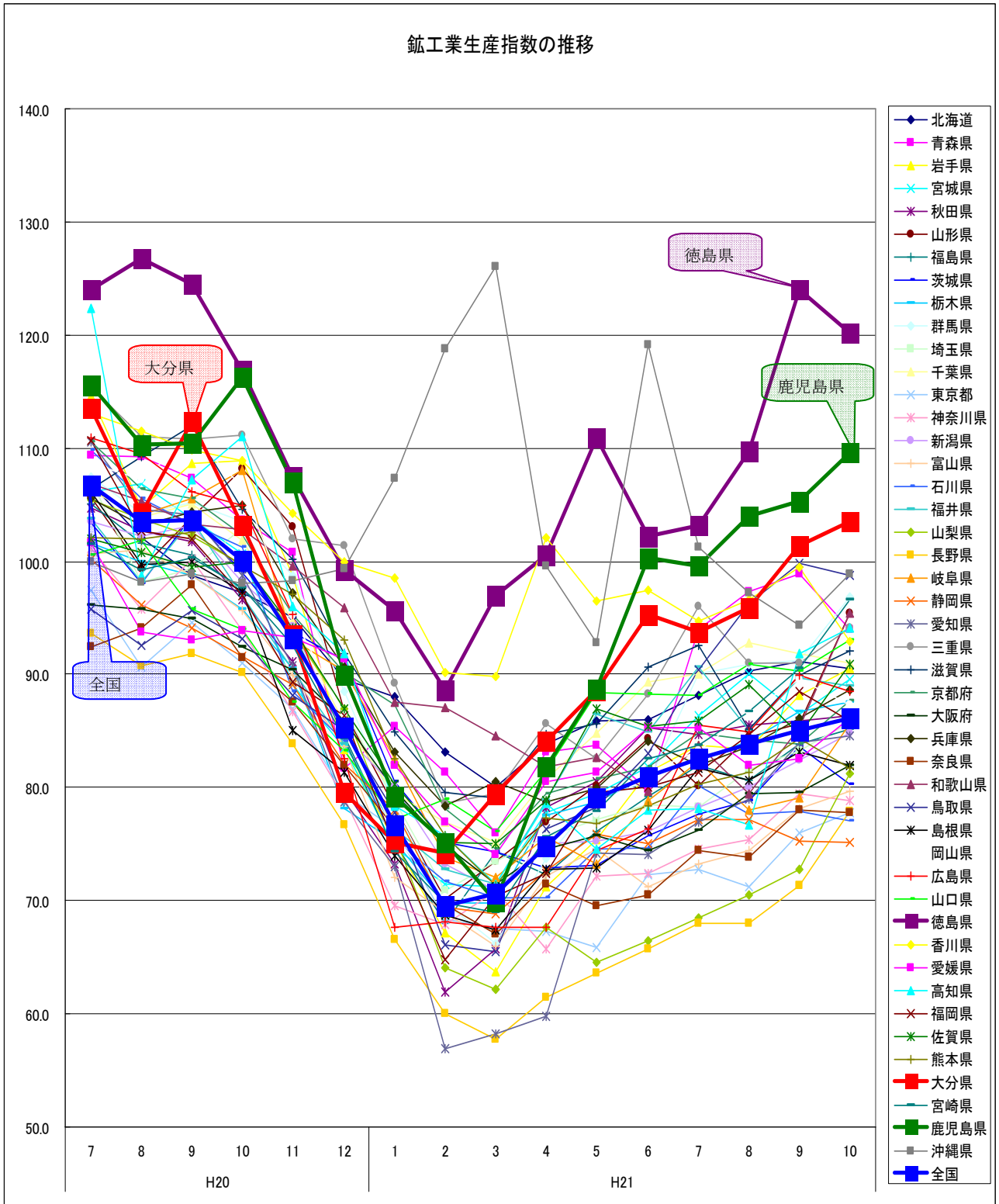
両県の業種構成をみると（図5）、徳島県は化学工業と電気機械工業の2業種だけでウエイトが全体の55%を超え、鹿児島県では、電子部品・デバイス工業と食料品工業がそれぞれ全体の30%に達する。

この4業種のうち、化学工業（徳島県）と食料品工業は、今回の不況でほとんど無傷だったし、他の2業種は、一時は落ち込んだものの、その後は順調な回復歩調をたどった。

つまり、不況の影響が小さい業種や回復の早かった業種への依存が高い県で鉱工業生産指数の復調が目立つこととなった。

図 1

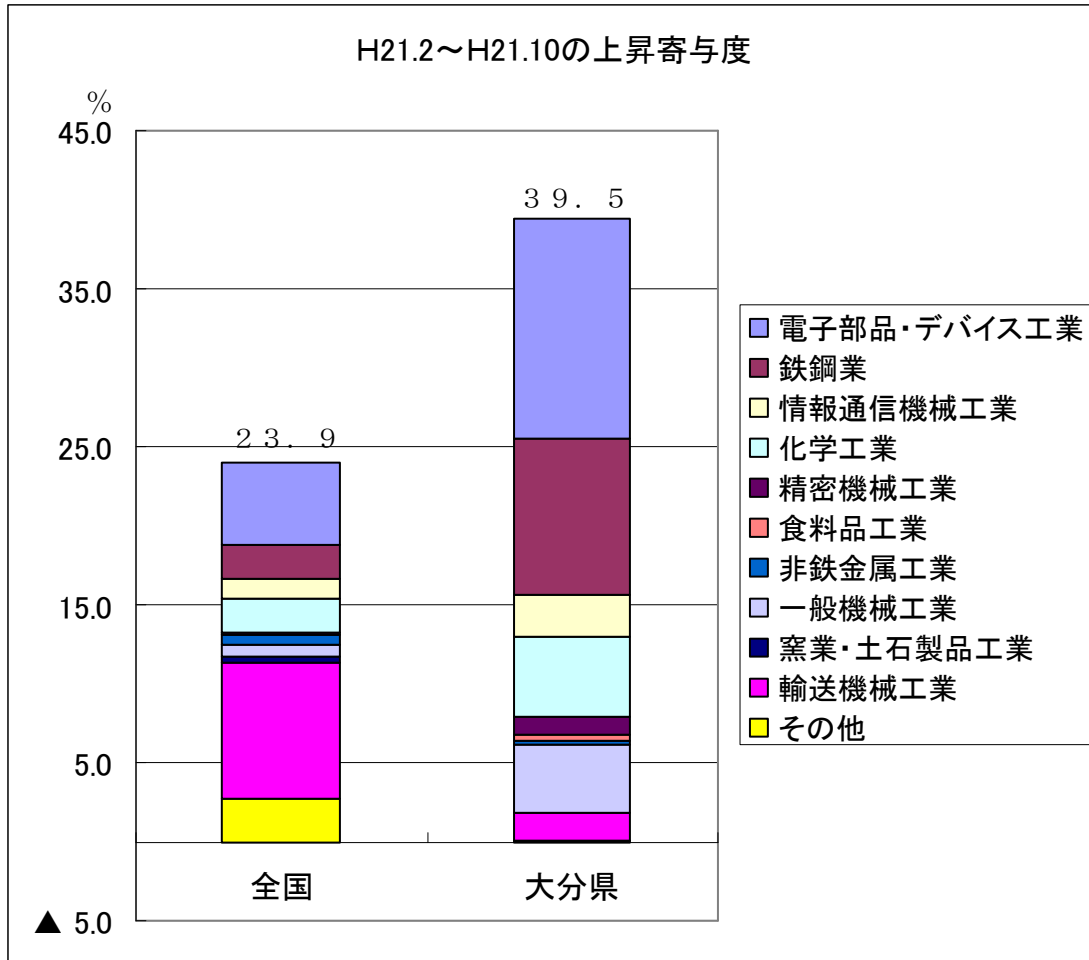
H17=100



資料: 経済産業省・各都道府県統計主管

※長崎県は H12=100 としているので、今回は除外した

図2



※寄与度=(業種別の対前年差×業種別ウエイト)÷(総合の前年値×総合のウエイト)×100  
 (総合指数の増減分に対して、内訳の増減分がどの程度あるかを表示したもの)

※付加価値額ウエイト…鉱工業指数では平成17年を基準として、全体が10000となるように付加価値額の業種別構成比を用いている

図3 業種別変動率とウエイト

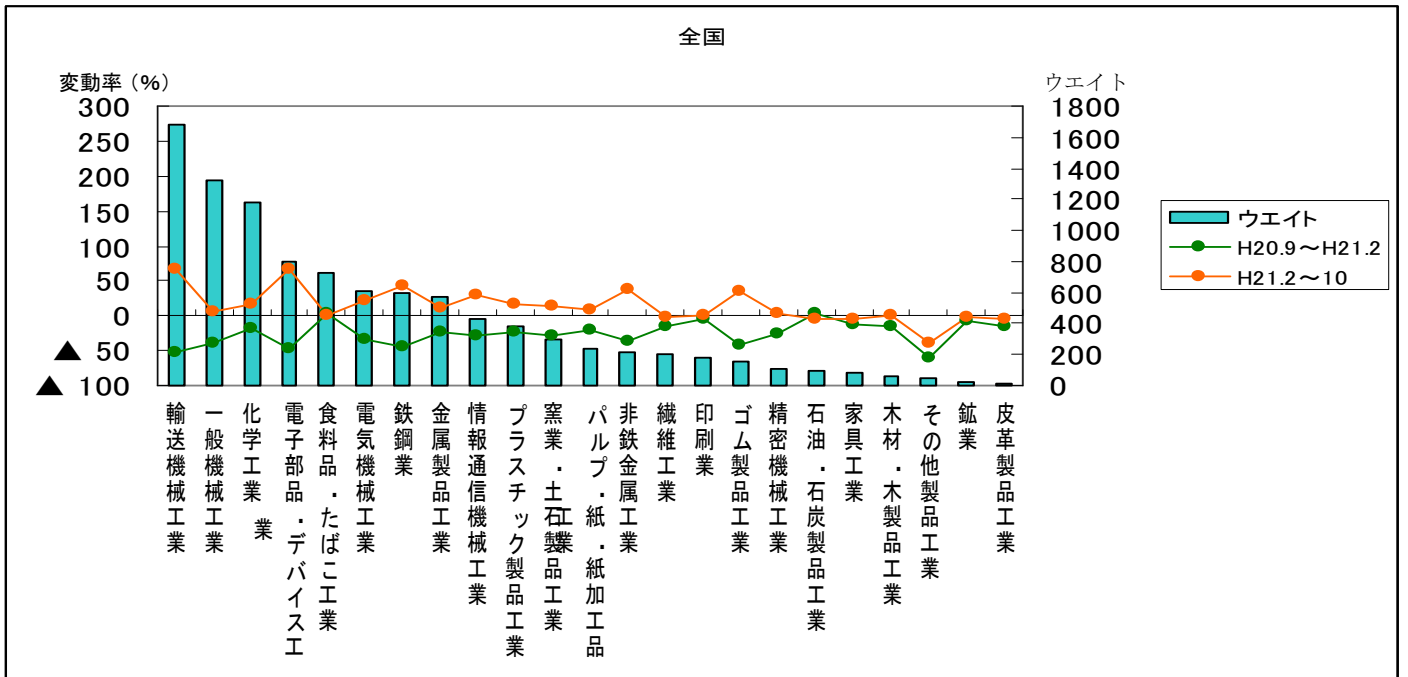
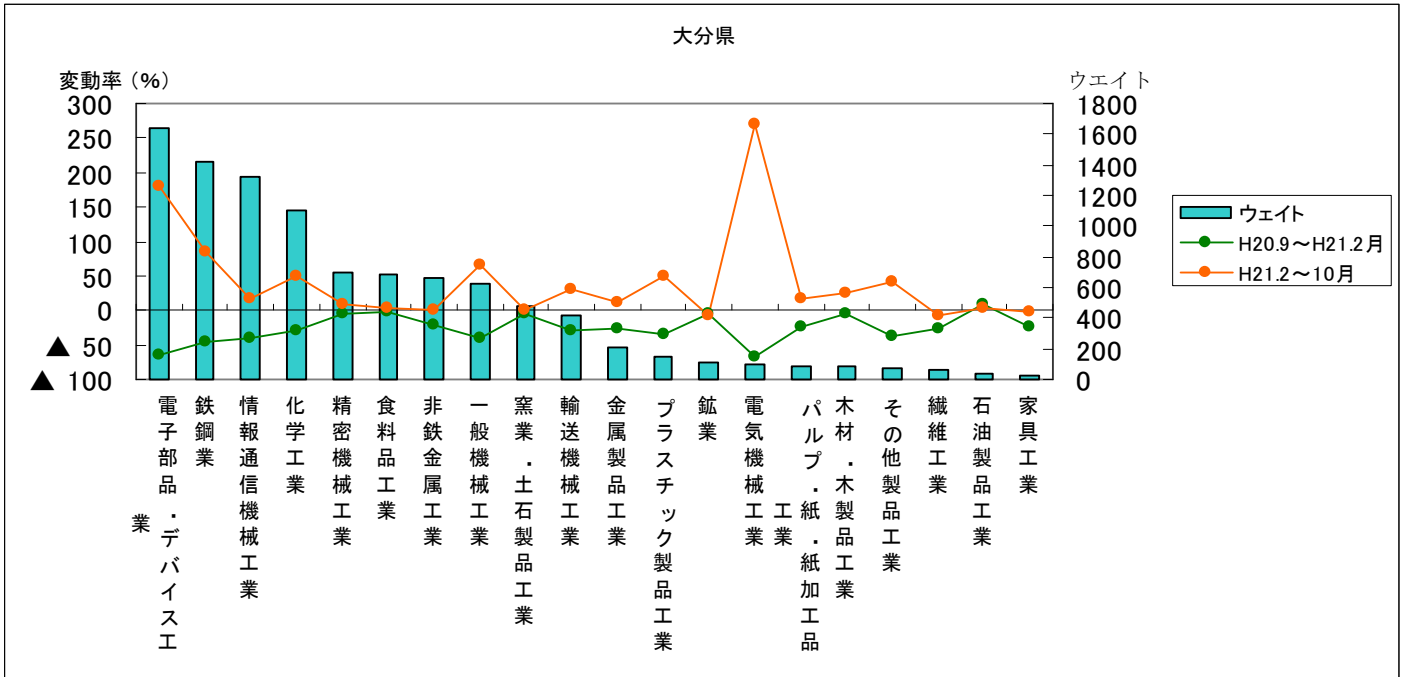


図4 大分県で、世界同時不況前の水準まで回復した主な業種

H17=100

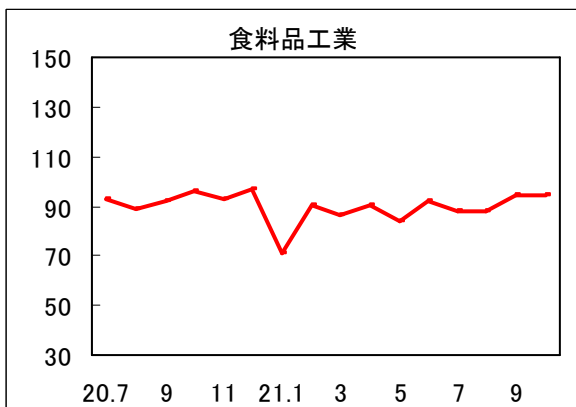
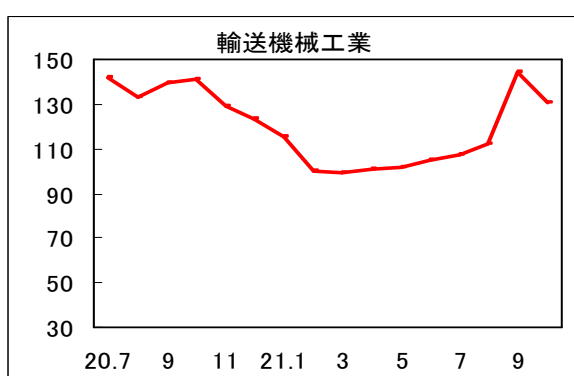
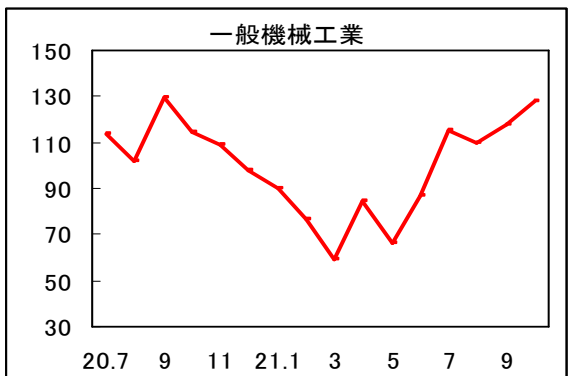
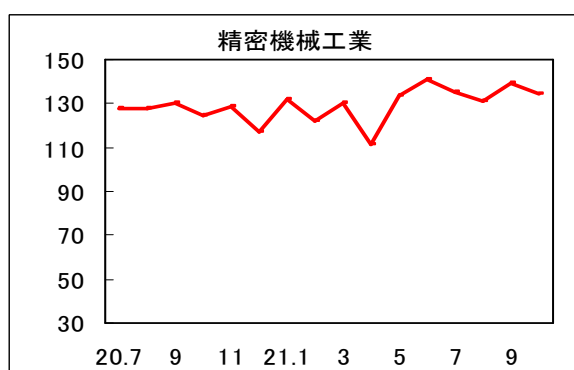
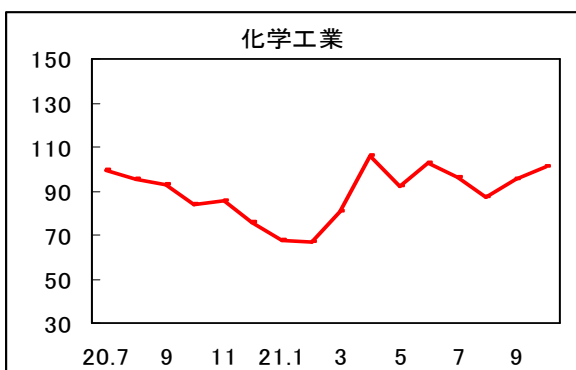
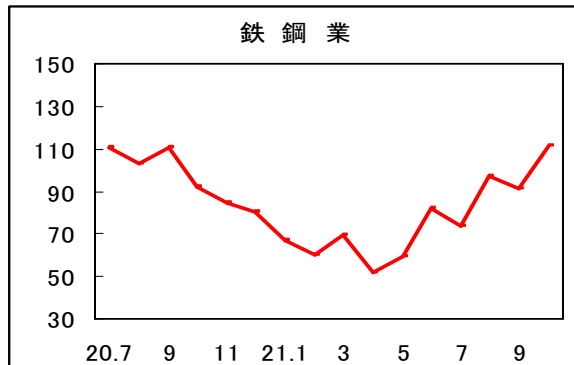
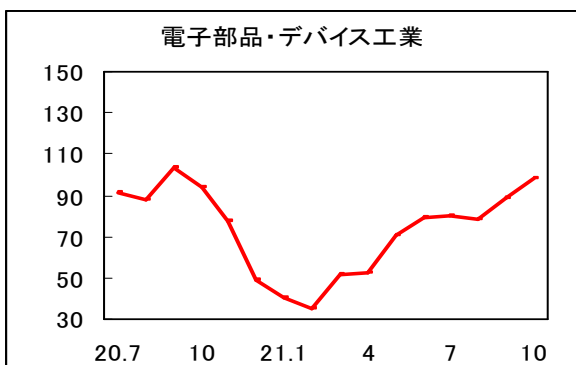


図5 徳島県、鹿児島県の平成21年2月から10月までの業種別上昇率とウエイト

